

昭和66年2月1日創刊 雑誌発行者
平成17年4月1日発行「第111号」1日発行
俳句雑誌 俳句雑誌社 創刊

俳句雑誌「おき」

4月号

沖

沖
発行所

こころの色

林 翔

えにし

辻美奈子さんが俳人協会新人賞を受けたことは誠にめでたい。妊娠・出産・育児をあれほど徹底して詠んだ俳人は滅多に無からう。

授賞式・記念パーティーの後、会場を変えて「沖」としての祝賀会が開かれたが、私が挨拶の中で、母堂辻直美さんの句、

子はすで見えぬ城持つ初つばめ
を挙げたら、美奈子さんは涙ぐまれた。まことに、この母あつてこそその俳人辻美奈子なのだと思う。

俳人協会賞を受賞した鈴木鷹夫氏も、元「沖」同人。鷹夫氏については「俳句文学館」（俳人協会会報）に書いたので重複するが、一部を抽こう。

年の豆思ひ出豆となりけり
北ひらく一秒二秒また閉づる

平成14年に鷹夫氏が沖同人を辞したのは「門」が「沖」の僚誌ではなく独立誌だということを表明する為であろうが、これは秋櫻子歿後に、

体温器振れば力や春の風邪

初音せりエアコン止めし無音界

蕊に満つる生の歓喜や梅ひらく

紅梅の花芯の色やこころの色

清水美代子さん逝く

あの席にもう美代子なし温め酒

追憶松村武雄氏

杉花粉飛ばば憶ふよタケチャンマン

百日祭を済ませてから、登四郎氏が馬酔木同人を辞して、「沖」が「馬酔木」の僚誌ではなく独立誌だということを発表したのと全く同じであろう。そして登四郎が「馬酔木」を辞しても、盟友翔は「沖」を兼ねて「馬酔木」に残り、鷹夫氏が「沖」を辞しても、節子夫人は「門」を兼ねて「沖」に残っておられる。奇妙なほどの符合にも、師弟の縁というものを楽しみじみと考えさせられるのであった。

「鷹夫さんの協会賞は第44回か。ぼくが貰ったのは第10回だから、もう34年も経ってしまったんだね。」と鷹夫氏に対して私ほついで言ってしまった。

林 翔



雪冷えの酒

能村 研三

耕三先生の思い出

かまくらが光源となる路地灯り

池田崇氏宅

燻り漬と雪冷えの酒もてなされ

もてなしの庭かまくらの灯が揺れし

たびら雪簾子堀を濡らしけり

落葉松を駆けのぼる火の萬一縷

このほど、「学園三師句碑」に刻まれた福永耕三先生の句である。今度の句碑は、三人の先生が長年勤めた市川学園に建立される。学園に在学する中高生にもなるべくわかりやすい句を選び、それぞれの句の季節も、登四郎が春、翔が夏、そして耕三が秋の句の中から選ぶことになった。ただ、先生は若くして亡くなられているので、色紙や短冊に揮毫されたものを探してくるのも大変な作業であった。私も初学時代、「二十代の会」で指導を受けているときに揮毫していただいた色紙や短冊を何枚か持っていたが、そのほとんどは句会が終わった後、居酒屋で俳句の話に花が咲きその勢いで揮毫していただいたものが多く、その余白には酒の染みなどもついていた。

今回は耕三夫人、美智子さんのご希望もあって句集『踏歌』に収められている、尾瀬で詠んだ「落葉松」の句になった。この色紙を探すのに

語り部のむすびは同じ朧の夜

涅槃図に適ふ照度は如何にせむ

祝・翔先生詩歌文学館賞

ゆるぎなき光年届く春の潮

春興や句碑の筆勢なぞりゐて

月おぼろ開眼を待つ句碑寝かせ

朴の芽の音なく膨る月夜かな

も苦勞があった。沖や馬酔木で直接警咳を受けた人たちにもいろいろ尋ねたりもした。郷里の鹿兒島の文学館には、貴重な揮毫作品があるとも聞いていたが、今回の句の色紙は無かった。結局愛知支部の柴田さん、羽根さんが耕二先生宅に贈った、色紙状の御影石に刻んだものを夫人から借り受けて、それを写して石碑に刻んだ。石から写すので心配もしたが、出来上がりを見て安心した。

かつて鹿兒島の、耕二先生の墓参りの帰り、東シナ海に面する千貫平の丘の上に建つ耕二句碑の筆跡をなつかしく思ったが、今度は自宅にほど近い、私の母校の思い出の地に三人の先生の句碑が建つことで、しばしば先生に出会えるようであろう。

能村研三



蒼茫集



曲るたび

藤原照子

被せ藁の中の孤高や寒牡丹
累々の絵馬と早梅日を分かつ
曲るたびかまくらの灯や大路小路
鱈一尾捌くもてなし再会す
神杉かむすぎの雪しづり浴び梵天祭
梵天待つ足場の雪を踏み固め

おせんころがし

遠藤真砂明

凜凜と枝の先まで冬けやき
舵切つて舳先を寒の真南へ
柁を挿し船小屋の罅柱
夕星を仰ぎこころの鬼やらふ
蝶生れておせんころがしきらら
波たをやかにきさらぎの訃を重ね

水甘露

松本圭司

綴ぢゑくぼ深くふくらむ干座布団
ひと息に飲みたる寒の水甘露
寒泳子禪の白をきりり締め
春近き海を眼下に子が尿る
寺山に大黒と逢ふわらび採
爆ぜて煮ゆる魚の身白し涅槃西風

淡海

坂本俊子

亡き祖母の静かに疾き野芹摘
淡海の深さ思へり春のゆき
師の故郷能登は海まで花菜畑
空の張り葱坊主にもこころざし
寒晴の空美しきふた七日
虎落笛青き地球の悲鳴かも

潮鳴集



摩耶夫人

林

玲子

子

摩耶夫人の吐息か今日のささめ雪

ひたすらに葛湯吹きをり明日ありと

立春大吉壁になじみしカレンダー

ゆつくりと葉ききくる白毛布

雪もよひ心療内科のルノワール

切り張り

清水

公治

風花を追ふ子の後をひしと追ふ

沖よりの順ひたすらに寒怒濤

切り張りの梅や桜や春隣

眈を笹鳴の羽根かすめけり

露の薑探り当てたる目の光り

寒明くる

中島

あきら

オリオンの楯傾けて寒明くる

風が添ふ梅のつぼみの啐啄に

襟首は風の抜け道春浅き

春風や放たば翔けむ千羽鶴

たつぷりと雪麦の芽を眠らせて

寒の試歩

宮坂恒子

寒の試歩手を振れば夢湧いてくる

雪嶺を今日の標として生きむ

夏々とゆく男らの息白し

川越えて連風の良きうねり晴

安穏と生くる不安や葱の花

浦風

白井剛夫

枯野に火ばつと点きさう大没日

除夜の鐘余生は川のごと流れ

崩落の崖剥き出しに山眠る

我が足に弾みまだあり冬の芝

浦風に香を乗せ野梅ひらきけり

沖作品



市川市

栗原 公子

冬麗やふれて分けあふ静電気
大寒やわが生れし日も母の忌も
月冴ゆる胸突き坂の前かがみ
色かたち字面も怖き海鼠かな
足跡をつけたくて出づ朝の雪
電子辞書に単四ふたつ冬籠る
キヤタピラー寒の更地に刻印す
大寒の影踏み整列乗車かな
故郷の波高からむ海鼠食ぶ
待春の望遠鏡の俯角かな
暁暗を出でてむらさき初筑波
白鳥の着水にわが身の力み
くれなゐを深く蔵して冬木の芽
棒の如身ぬちをくだる寒の水
一滴の夕日こぼるる鴨の嘴
寒波来るらし銀紙の銀の音

東京

坂 ようこ

東京

高木 嘉久

千葉

鈴掛 穂

能村研三選

工藤 進

廻廊のこれぞ永平寺の凍か
東京の雪吊に雪来たりけり
身ほとりに世界の香味春隣
正論を吐きしさびしさ冬北斗
耳たぶのやうな鶏冠雪降り来
大寒の濤の牙むくオホーツク
鳥が尾を上ぐるは歓語梅香る
雪だるま溶けてみ空に還りけり
履歴書に待春の瞳の写真貼る
億年の遺伝子守る海鼠かな
大寒や陶窯に火のきほひ立ち
一舟の水脈ひかり来る春隣
湧水をめぐらす社梅ふふむ
飛ぶ鳥の光となりぬ初御空
雪折れの松に紅さす夕茜
除雪車去る闇に尾灯を沈ませて

千葉

佐々木よし子

北海道

梶川智恵子

大雪や命まるめて鳥けもの
追ひ越して父の筈なき冬帽子
初鼓炎の芯の強くなり

市川市

代田 幸子

産み月の娘と分けあふ陽水仙花
山古志の川いくつ消す雪しまき
飛行船ゆるり向き変ふ四温の日

東京

中尾 公彦

冬銀河地下シエルターのありどころ
大寒のもの一つに鳩だまり
磁石置く地形の芯の霜柱

千葉

林 昭太郎

初陣の気負ひにも似て探梅行
累々と卵醒めぬる寒夜かな
吹雪く夜はノイズの中に地方局

鈴木 伸一

雑巾の捻れしままの四温かな
ティーバッグ糸で操る春隣
凍滝の水櫛の巖きらめけり

東京

石川 笙児

逆光を放ち寒濤せりのぼる
余滴なほ一纏に縋り垂氷照る
妖精の覚む呼気のごと水烟る

奈良

福山 悦子

きんきんと晴れ大寒の日なりけり
スタートの馬のたかぶり雪催
コーランの声染みわたる冬夕焼

さくら東風ひとこと攫つてゆきしかな
春の夜の何を探しに立ちしかな

新潟

長谷川 春

降る雪にくるまれにけり初山河
束で来し賀状双手に一礼す
青竹の樋快走す寒の水
こきと鳴る身の蝶番氷点下
オリオンのぐらりと歪む嚏かな

神奈川

堀口 希望

紫香楽宮隠しけり春の雪

新人賞予選句（四月）

大寒やわが生れし日も母の忌も
キヤタピラー寒の更地に刻印す
白鳥の着水にわが身の力み
寒波来るらし銀紙の銀の音
耳たぶのやうな鶏冠雪降り来
億年の遺伝子守る海鼠かな
大雪や命まるめて鳥けもの
初鼓炎の芯の強くなり
冬銀河地下シエルターのありどころ
累々と卵醒めぬる寒夜かな

栗原 公子
高木 嘉久
鈴掛 穂
坂 ようこ
工藤 進
佐々木よし子
梶川智恵子
代田 幸子
中尾 公彦
林 昭太郎

沖作品 選後句評

*
能村研三

大寒やわが生れし日も母の忌も 栗原 公子

人間の生と死の偶然性ともいえるのか、自分の生まれた日と他人が生まれた日がたまたま同じであったりすると、不思議と親近感をもったりするが、自分の生まれた日に、自分と縁のある人が亡くなったりすると、これまた不思議な縁というか、いやな気分にもならず親近感を感じるものである、増して、これが肉親ともなると、それはもつと増大し「生命のつながり」といったものを感じさせる。作者の誕生日は、一年のうちでも最も寒いとされる大寒に母が愛しむように自分を産んでくれた。自分がもの心がつかない時は気がつかなかったことだが自分も母親になってみると、自分を産んでくれた時の母のありがたさをひしひしと感じた。その母は、後に自分を産んでくれた大寒

の日に亡くなった。そこには、単なる生と死の偶然性でなく輪廻転生といった不思議さを感じとった。もう一句「冬麗やふれて分けあふ静電気」、ドアノブに誰かと一緒に触れた時に感じた静電気だが、中七の「ふれて分けあふ」という措辞がおもしろい。

キヤタピラー寒の更地に刻印す 高木 嘉久

高木さんは、いつも類想類句のないオリジナリティな発想で句を作られる方であるが、今回の「キヤタピラー」の句にも素材の新鮮さ視点の面白さがあった。キヤタピラーは、本来はアメリカの会社の商標名であるが、訳すると毛虫という意味だそう。ブルドーザーなど建設機械の車輪の変わりに鉄製のベルトを掛け走行する装置。この句、単にキヤタピラーの素材の珍しさだけでなく、中七の「寒の更地」に深い意味とドラマがある。大きなお屋敷があった所も何かの事情で手放さなくてはならず家が取り壊された。その後を整理するブルドーザーはその思い出を踏みにじるようにその土地を行き来して轍を刻印していった。肌で感じる寒さ以上の世の中の寒さを感じとった。もう一句「電予辞書に単四ふたつ冬籠る」の句、今では俳句を作る人に欠かせない道具となった電子辞書、そのエネルギー源は小さな単四の二つの電池だが、それを抱えて静かな書齋で推敲の間を過ごした。(以下略)